

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32606

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2022

課題番号：18H05686・19K20887

研究課題名（和文）プロイセンの国民経済の形成期に多国籍化する家族企業の利害構造の解明

研究課題名（英文）Economic Interests of Prussian Families Dispersed Internationally in the Process of National Economy Formation

研究代表者

竹原 有吾（TAKEHARA, Yugo）

学習院大学・経済学部・准教授

研究者番号：80823591

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀以降にブランデンブルク＝プロイセンで見られるようになった宮廷ユダヤ人は、商業活動の傍ら、地域のユダヤ社会の代表としても活躍している場合が少なくなかった。彼らは親戚関係であっても必ずしも互いにビジネスで協力し合うことはせず、独立して国境を越えて商業活動を展開している場合も多かったが、ユダヤ人の一族のメンバーそれぞれが活動拠点とする地域でユダヤ社会の組織化に貢献していたことで、特定の一族がヨーロッパ各地で名声を得ることになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プロイセン王国を拠点に国際的に経済活動を展開した宮廷ユダヤ人を中心に、彼らがどのようにして18世紀にかけて社会的にも経済的にも目立つ存在になったのかを研究した。その結果、国境を越えて商業活動していたユダヤ人が、特定の地域の社会が発展するためにも貢献していて、国際的に商業活躍を展開していくことと特定の国民経済が発展するように尽くすことは矛盾していなかったことを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：Family members of the court Jews of Brandenburg-Prussia that appeared after the 17th century were living in international dispersion, but did not necessarily cooperate with each other in international commercial activities, even if they were relatives. Each of them contributed to the development of the Jewish community in the area where they were living. As a result, some Jewish clans became famous all over Europe.

研究分野：経営史

キーワード：宮廷ユダヤ人 ユダヤ共同体 婚姻戦略

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

プロイセン王国では、18世紀には貨幣鑄造業や絹織物業の主要な担い手として、19世紀に入ると大銀行や大企業の経営者としてユダヤ人の活躍が目立つようになった。こうしてユダヤ人が経済的に活躍することができた背景には、ユダヤ人がまず重商主義政策を採用する国家の経済発展のために貢献するようになり、そのうえでユダヤ人だけでなく周囲のキリスト教徒の経済的な利益にもなるように経済活動を展開するようになったことがあった。ユダヤ人の経済的な台頭は、ユダヤ人が進出できる産業分野が時代とともに拡大していったことに加え、特に「ユダヤ人の解放勅令」が出され、さらに商業における「営業の自由」が実現して以降、ユダヤ人が同じ国家市民としてキリスト教徒とビジネスにおける協力関係を積極的に形成していったことが要因としてあった。このように18～19世紀のプロイセン王国のユダヤ人には、特定の地域における社会・経済の発展に貢献しようとする姿勢が顕著に見られた。しかしプロイセン王国で経済的に活躍した宮廷ユダヤ人の一族に注目してみると、必ずしも特定の地域にとどまり続けて、その国や地域の経済発展のためだけに尽くしていたわけではなかったことが見えてくる。この時代は、プロイセン王国の中で国民経済が形成されていった時代であり、特定の宮廷ユダヤ人の一族の中には、確かに国民経済の形成に貢献している人々が現われてきていたが、その一方で同じ一族の中には、外国に渡り、その移住先の社会のために経済活動を展開していくという全く逆の行動を取る人々も見られた。同じ一族の中に周囲のキリスト教徒と同等の国家市民になることを目指しているユダヤ人と、故郷にとどまらずに国際的に散らばって、移住した先の経済発展に貢献しようとするユダヤ人がいたことに関して、そうした互いに異なる考え方を持った人々が一つの一族の中でさえも同時に存在することについて、どのように説明することができるかが課題として出てきた。

ユダヤ人の経済的な台頭要因に関する、ユダヤ人の国際展開を重視する考え方と、国内におけるユダヤ人とキリスト教徒の経済的な協力関係に注目する考え方の2つを結びつけることはできないのか、検討を進めることにした。

### 2. 研究の目的

国内にとどまって事業を展開する人々と外国に渡って事業を展開する人々の両方がいるユダヤ人の一族に関して、国民経済の発展に貢献することと、一族の利益を重視することの間に矛盾はなかったのかについて明らかにすることを本研究の目的とした。具体的にはプロイセン王国の宮廷ユダヤ人として王国の国民経済の発展に貢献する者を輩出するだけでなく、王国を離れて経済的に活躍する者も生み出した一族として、ゴンペルツ家に注目して分析を進めていくことにした。

18世紀から19世紀にかけて、宗教の信仰で結ばれた一族の絆が、どの国の市民権を持っているのかによって切り離されてしまう危機に直面していたように見える宮廷ユダヤ人の一族の事例を調べることによって、国際的に散らばっていくことと、国民経済の形成に貢献することの両方を通して、ユダヤ人が本質的には何を目指していたのか、またその目指していたことは、大きな歴史の流れの中でどのように位置づけることができるのか、こうした課題に取り組んでいくことにした。

### 3. 研究の方法

最初に同じ一族の中でどのような利害関係が形成されていたのかを調べることにした。具体的な研究方法としてはゴンペルツ家に関する史料の収集に力を入れた。しかしゴンペルツ家の一族内部の利害関係がわかるような史料が見つかることはなく、また研究を進めるうえで障害となる問題点も見えてきた。それは一族の範囲の問題であった。ドイツ各地の宮廷ユダヤ人は、宮廷ユダヤ人の子供同士が結婚することによって、互いに親戚関係にあることが多かった。それに加え、親戚同士であっても敵対関係にあることもあり、一族の範囲をどこで区切ればよいのかが判断しにくいといったことがあった。そのため一族の範囲を恣意的に決定して利害関係の分析を進めるのではなく、むしろ宮廷ユダヤ人としてユダヤ人の一族がどのように経済的かつ社会的に台頭してきたのかを見ていくことで、宮廷ユダヤ人同士の個別の対立関係には触れずに研究を展開していくことにした。

研究の過程では、研究活動を開始した段階では想定していなかった学内業務や研究室の部屋の移動などにより研究を進めるうえで必要な時間を十分に確保することができず、その後、新型コロナウイルスの流行による渡航制限などで、史料調査の機会も失われたことから、研究方法について再検討することになった。

コロナ禍においては、国内にいても手に入れられる文献や編纂史料等の考察に多くの時間を費やすことになった。例えばゴンペルツ家と親戚関係になっていた人物の回顧録があったので、その分析を進めることにした。またプロイセン王国だけでなく、その周辺の国々で活躍した宮廷ユダヤ人についても文献を用いて調べていくことにした。さらに宮廷ユダヤ人が台頭してきた時代がその前の時代とどのような点で異なっていたのか、歴史的な変化を明らかにするために、

宮廷ユダヤ人が見られ始めた中世後期のドイツ諸都市でユダヤ人が置かれていた状況についても最新の研究を踏まえて確認していくことにした。

#### 4. 研究成果

まず中世後期のドイツ諸都市におけるユダヤ人が置かれた状況については、次のことが確認できた。中世のドイツ諸都市へユダヤ人が移住した背景には、9世紀後半から10世紀後半のムスリムによる掠奪の被害など、地中海地域がユダヤ人にとって以前ほど安心して暮らせる環境ではなくなっていたことがあり、また10世紀以降のドイツの司教座都市では、司教が都市を聖地イェルサレムやローマを模倣したものにしようとしていて、教会がユダヤ人の聖書の知識を重宝していたということもあり、そのような中で都市内部にユダヤ人の住む場所を提供するような動きがあった。そしてザーリアー朝の王国内では、司教の都市支配権が認められていた地域でユダヤ人が見られるようになった。ドイツ諸都市では都市化が進む中で特に13世紀後半から1330年代にかけてユダヤ人の定住地域は大きく広がっていったが、14世紀半ば以降、都市の参事会の力が強くなり、ユダヤ人はその参事会の作った規範の下で生活することを強いられるようになる、ユダヤ共同体の数は減少することになった。

次に14～16世紀と17～18世紀に分けて宮廷ユダヤ人の特徴を比較することで、19世紀に至るまで経済的な活躍が目立っていた宮廷ユダヤ人が、どのようにしてヨーロッパ各地に現われたのかについて、その特徴を具体的に明らかにした。

14～16世紀にブランデンブルク選帝侯やブラウンシュヴァイク＝リュネブルク伯、ザクセン選帝侯などに仕えた宮廷ユダヤ人の大半に共通していることは、ほんの一部の例外を除いて、その一族が基本的にほぼ一代で宮廷ユダヤ人の役目を終えて、宮廷ユダヤ人として生活していた地域から追放されるなどしていなくなっていたということである。その例外とした事例を含めても、この時代に同じ地域で何世代にも渡って宮廷ユダヤ人として活躍していたような一族は確認できなかった。

17～18世紀にブランデンブルク＝プロイセンやハノーファー、ザクセンで活躍した宮廷ユダヤ人の場合、複数の世代に渡って宮廷ユダヤ人を輩出する一族がいくつも見られたということの特徴的な点として挙げることができる。また彼らが名字を用いるようになっていたことも特徴として確認できる。こうして名字を利用するようになったことで、一族の名声がユダヤ人であるのかキリスト教徒であるのかを問わず広まるようになり、特定の宮廷ユダヤ人の一族が諸侯の信用を得やすくなったり、ユダヤ共同体の中で高い地位を就きやすくなったりしていたこともあったのではないかと推測される。もっとも出身地と名前でも各々が認識されるようになり、複数世代に渡って活躍した宮廷ユダヤ人の一族が確認しやすくなったとも考えられるが、17～18世紀に活躍した宮廷ユダヤ人には貧しい状況から脱して裕福になった者が少なくなく、14～16世紀に活躍した宮廷ユダヤ人と親戚関係があったとは考えにくい。実際、本研究で注目したゴンペルツ家に関しては、14～16世紀に活躍した宮廷ユダヤ人との血縁関係は確認されなかった。ゴンペルツ家は、決して裕福ではなかったが、三十年戦争の間に戦利品の売買に関与するところからビジネスを大きくしていったのではないかと考えられてきた。また一族を構成する人々が増えていき、各地のユダヤ人と広く親戚関係を築いていったのは、エリアス・ゴンペルツがブランデンブルク＝プロイセンの宮廷ユダヤ人として軍需物資を供給したり、多額の資金を貸し付けたりして、経済的に活躍するようになってからのことであった。このあと、ゴンペルツ家は貨幣鋳造業やベルリンの取引所の建て替えなど、プロイセン王国内だけでも19世紀初めまで、経済的にも社会的に活躍することになった。エリアス・ゴンペルツの息子ルーベン・エリアス・ゴンペルツは、当初はヴェーゼルを拠点にベルリンにあるブランデンブルク＝プロイセンの宮廷やドレスデンにあるザクセン選帝侯の宮廷に仕えた。またウィーンの神聖ローマ皇帝に仕えることもあり、ジュエリーや穀物だけでなく弾薬や手形も取り扱うことで利益を上げた。その息子はプレスラウでシュレージエンのラビとして活躍し、このラビの孫ルーベン・サミュエル・ゴンペルツは、19世紀転換期に取引所の建物の建設に必要であった多額の費用を貸し出し、ユダヤ人とキリスト教徒が共同で取引所を管理する組合を設立し、そのユダヤ人側の代表として活躍した。さらにベルリンのユダヤ共同体の長老として、ユダヤ人の政治的な解放の実現に向けてプロイセン政府に働きかけるなどした。ルーベン・エリアス・ゴンペルツの従兄弟の子モーゼス・レヴィン・ゴンペルツは、プロイセン王国に軍需物資を納入するなどのビジネスを展開した。その息子のヘルツ・モーゼス・ゴンペルツは、宮廷ユダヤ人としてプロイセン王国の貨幣鋳造業で活躍した。このようにゴンペルツ家は代々宮廷ユダヤ人を輩出し続けていた。

本研究では宮廷ユダヤ人の一族の回顧録の分析も行った。この回顧録を作成したのは、グリュッケル・フォン・ハーメルンという人物で、1614年にフランクフルトを追放されてハーメルンに渡ったゴルトシュミット家の人間の妻となった人物であった。ちなみにゴルトシュミット家は、ハーメルンではなくカッセルに渡った一族が宮廷ユダヤ人として活躍したことが知られている。またグリュッケルの親族の多くは、各地の宮廷ユダヤ人と婚姻関係を築いていたことが知られている。そうした人物の回顧録を分析することを通して、宮廷ユダヤ人について理解するうえで有益な情報が得られることを期待した。

この回顧録は、グリュッケルが直接目にした実際の出来事だけが記載されているのではなく、失踪した人物の話など部分的に創作された物語が付け加えられていた。ただそれでも当時の商業や婚姻に関わる慣例等をすべて創作して回顧録に描いたとは考えにくく、あくまでそうした

慣例等は事実であったと見なして回顧録の分析を進めた。具体的には婚姻関係の形成に際して、どのようなことが重視されていたのかについて見ていくことにした。どういった一族の間で結婚が行われていたのか、また結婚持参金がどれくらいの金額であったのかが回顧録から読み取れたため、それを考察した。その結果、回顧録からは、たとえ宮廷ユダヤ人になれなくても、裕福になろうと努力することで報われるシステムがユダヤ社会の中に生まれていたことも見えてきた。ユダヤ人は結婚持参金の金額を重視した婚姻戦略を採用していたため、沢山稼ぐことができれば、子供たちがすでに名声を誇っていたユダヤ人の一族と結婚することで、ユダヤ社会で名声を獲得することができた。

17～18世紀の宮廷はユダヤ人にとって魅力的なビジネスの相手であり、宮廷とのそうした経済的な関係は宮廷ユダヤ人にとってできる限り長く維持させたいと考えるようなものであったと考えられる。そしてそうした宮廷とのビジネスは、名声を重視するユダヤ社会を背景に、宮廷ユダヤ人の子供たちと商業で活躍する裕福なユダヤ人の一族の人間が結ばれることで世代を超えて継承することが可能になったのであった。

こうした回顧録の分析では、宮廷と経済的な取引関係を構築することが、それまでのユダヤ人の商売からすれば比較的风险の小さいもので、ユダヤ人の側には積極的に宮廷ユダヤ人になろうと考えてもおかしくない状況があったことも見えてきた。そしてそうした宮廷相手のビジネスはキリスト教徒にとっても魅力的なビジネスであったのではないかと考えるようになった。そこで宮廷相手のビジネスを展開していたユダヤ人が、当時、ユダヤ人と同じような宮廷商人であったキリスト教徒とどのような違いがあったのかについても確認することにした。18世紀に活躍したプロイセン王国のキリスト教徒の宮廷商人としては、ダビット・シュプリットゲルバーがいるが、彼も宮廷ユダヤ人のように国に対する軍需物資の納入や資金供給を行っていた。また一族がユダヤ人と同じように国際的に散らばって生活するようになった点も宮廷ユダヤ人と共通していた。ただ婚姻戦略に関しては、宮廷ユダヤ人がユダヤ人の商人やラビの一族と結婚することが多かったのと比べると、シュプリットゲルバーの一族が選択していた結婚相手は、比較的多様であった。確かにダビット・シュプリットゲルバーの娘たちは、彼の事業経営に加わっていた身近な人間と結婚していたが、孫たちは貴族や軍の少尉と結婚していた。

本研究では宮廷ユダヤ人のビジネス展開や婚姻戦略に加えて、宮廷ユダヤ人が地域のユダヤ共同体とどのような関係を築いていたのかについても検討を行った。ユダヤ人の商人にはユダヤ社会における名声を重視する姿勢があった。宮廷を通してユダヤ共同体の設立を実現したり、ユダヤ共同体の上級長老の地位に就いたりしてユダヤ社会における名声を誇れるように宮廷ユダヤ人になったり、宮廷ユダヤ人の地位を維持し続けたりしようと努力していた。こうした地域社会に貢献しようとする姿勢は、都市の市民権を持たなかった18世紀のシュプリットゲルバーの一族には見られなかったことであった。もっともこのような姿勢がドイツ各地のキリスト教徒の宮廷商人に共通していたわけではなかった。都市の市民権を持ったキリスト教徒の宮廷商人の場合には、地域社会のために貢献しようとする姿勢が見られた。

以上のような研究活動を通してわかったこととして、17～18世紀という時代は19世紀にさまざまな人々が国家市民へと統合されていく一つ前の準備段階であったということである。その準備段階では、同じ宗教の信者同士の組織化が進展していた。都市共同体が中世後期にかけて強力になったことで減少してきていたユダヤ共同体が、この時代に増加に転じていた。それは宮廷ユダヤ人がユダヤ共同体を設立するなどして地域のユダヤ社会に貢献して、ユダヤ社会における名声を重視する中で起こっていた。こうしたユダヤ社会の名声の重視は、ユダヤ人がキリスト教徒に改宗しない限り、ユダヤ人がキリスト教徒の都市市民とほぼ同等の市民権を得て、それまでユダヤ人に課されていた職業等の様々な制約が撤廃されるまで続いた。

宮廷ユダヤ人の一族が国際的に散らばっていったのは、必ずしもビジネスのためではなかった。一族を構成する人々は、それぞれ移り住んだ地域のユダヤ社会のためになるように貢献し、その地域のユダヤ社会で名声を高めようと努めていた。彼らはそのことによって、結果的に一族の名声をヨーロッパ各地で高めることになった。このように少なくとも17～18世紀においてユダヤ人の特定の一族が国際的に散らばったのは、決して国民経済の形成という方向性から逆行するものではなかった。一族を構成する人々は、それぞれが渡った先の国民経済の形成に貢献しつつ、一族の名声を国際的に高めていったのであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 竹原 有吾	4. 巻 第60巻第2号
2. 論文標題 17-18世紀ドイツの宮廷ユダヤ教徒台頭の社会・経済的な要因	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 経済論集（学習院大学）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹原有吾
2. 発表標題 近世ドイツの宮廷ユダヤ族の国際展開
3. 学会等名 立教大学経済史・経営史ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------